

ルイ・マクニースの1930年代詩作品と〈交信〉としての 詩の理想

五十嵐奈央

1. はじめに

ルイ・マクニース(1907-63)¹⁾は、アイルランド北部のベルファストに生まれた詩人であり、現代北アイルランド詩人たちに対する影響の大きさから、近年、主にアイルランド文学の領域において再評価が進んでいる²⁾。一方で、イングランドで生涯のほとんどを過ごしたマクニースの作品には、同地の社会的、政治的状況が反映されている。特にオックスフォード大学を卒業し、パーミンガム大学で古典文学の講師として働き始めた1930年以後は、イングランドの都市と人々を描いた作品を多く創作している。

マクニースが詩人としても本格的に活動を始めたこの時期³⁾、ヨーロッパでは、ドイツにおけるファシズムの影響等による政治的混乱が人々に次の世界戦争を予感させていた。この危機の最中に、W・H・オーデン(1907-73)やスティーブン・スペンダー(1909-95)、セシル・デイ＝ルイス(1904-72)といった、マクニースと同年代の詩人の多くは、自律的な純粋芸術ではなく、社会的な事象を主題とした詩を追求し、詩人の社会参加の必要性を説いた。このような政治的関心の強い詩人達は、当時知識人を魅了していた共産主義に傾倒し、全体主義批判や、戦争への言及を含む作品を書いている。マクニースの『詩集(Poems)』(1935)中の詩には、それらに比べ、表立った政治的見解の表明が見られないために、前時代的な傾向に回帰しているとの評価を下す批評家もいた⁴⁾。

しかし、30年代のマクニースの作品には、詩人自身と社会との関係についての思索を読み取ることができる。本論では、共産主義思想の広まりの中で、個人主義者としてのマクニースの側面を示す作品を考察した後、語り手の他者との結びつきに対する願望が読み取れる作品を分析する。本論の中心となる第3節では、〈共有〉への志向と呼ぶことのできる、他者との関わりへの意識を、30年代のマクニースの代表作『秋の日記(Autumn Journal)』(1939)において分析し、それが〈交信〉としての詩の確立という試みに繋がっていることを明らかにしたい。

2. 1930年代における「個人性」の問題

はじめに、1930年代に政治と芸術の両面で特別な意味を持っていた、個と集団の関係についてマクニースの作品を通して考えてみたい。『詩集』に収録された「クリスマスのための牧歌詩（“An Eclogue for Christmas”）」には、現代社会に対するマクニースの問題意識が表われている。この詩では、現代の都市と田舎の問題が、それぞれ語り手“A”と“B”によって語られる。彼らの対話の中で特に注目すべきなのは、「個人性（individuality）」の危機に関する話題である。都市居住者と考えられる“A”は、現代生活において、自身は「道化（Harlequin）」（1.26）であり、「この個別の生に構わずパレットナイフで外皮を剥がれた抽象物」（1.30）⁵にされてしまったと語り、個別の人間としての生が奪われていることを話す。

〈個人性の喪失〉というべきこの問題は、オーデンとの共作旅行記『アイスランドからの手紙（*Letters from Iceland*）』（1937）に収録されたマクニースの書簡詩「グレアムとアナへの手紙（“Letter to Graham and Anna”）」⁶の主題でもある。この詩では、手紙（＝詩）の書き手である語り手がロンドンに住む友人夫妻に向けて、自身の居住地でもある都市の生活の忙しさについて、旅行先のアイスランドとの比較を交えながら語っている。強調されているのは、都市の「常に動いている（Always on the move）」（1.44）⁷人々の姿である。動き続ける人々は都市では失くした物を探すことができないという具体例を語る語り手は、彼らを非個人的な代名詞「ひと（one）」で指し示す。しかし、「ひと」は語られる対象から「私（I）」という語る主体に転換する。

I dropped something, I think, but I am not sure what
And cannot say if it mattered much or not,
So let us get on or we shall be late, for soon
The shops will close and the rush-hour be on.⁸ (ll.55-58)

何か落としたように思うけど、それが何なのかあやふやだ
それにそんなに大事だったかどうか分からない、
だから急ごう、じゃないと遅れてしまうよ、もうすぐ
店が閉まるし、ラッシュアワーになってしまうから。

この箇所では、語り手による客観的な語りで話題にされていた大衆の考えが、突如その中の一人によって代弁されているのだと解釈できる。自分が何を落としたのかも、それが重要なのかも分からない「私」の思考は、時間の経過の速さに身を任せる受動性によって希薄化していることが読み取れる。

また、失くしたものが「大事だったのかも分からない」と述べる「私」が、話し相手に、急がないと遅れてしまう、と語りかける箇所では、“or”という接続詞が、それぞれ別の意味で用いられながら、どちらも「私」の受動的な状態を反映している。前者は落としたものが「重要」か「そうではないか」という二つの判断の間のどちらにも定まることのできない思考の浮遊状態を示唆しており、「遅れてしまう」という、急がなかった場合の帰結を示す際に用いられている“or”は、流動する社会に生きる「私たち」にとって、思考せずに動き続けることが不可避であるという事実を前景化させていると考えられる。

引用部分でさらに注目したいのは、「私 (I)」が、一人称複数「私たち (us, we)」を用いて自分と同様の行動をとる他者の存在に言及している点である。非個人的な人称 (one) から一人称単数 (I)、一人称複数 (we) への主語の変化は、落ち着いて思考することを許さぬ流動的な生き方が、集団的現象であることを強調していると言える。意志や自覚の欠けた人間の行動は、詩の後半でも引き続き批判の対象として言及され、頂上に何があるか分からないのに尖塔に登る試み (1.118-19) や、「サイズが合わないかもしれない帽子をかけたクジ」(1.120)⁹として揶揄されている。この詩で〈個人性の喪失〉は、現代社会における個々の人間の自発的な行為の欠如という点から問題化されているように思える。

「個人性」に関する議論は、30年代における特定の政治的文脈にも位置づけられる。自伝『調子はずれの弦楽器 (*The Strings Are False*)』(1965) でマクニースは、マイケル・ロバーツによって編集・出版されたアンソロジー詩集『ニュー・シグナチャー (*New Signatures*)』(1932) に言及し、掲載作品の作者¹⁰の多くが傾倒した共産主義の最大の魅力が、「自己を埋没させなければならない」¹¹と、自己犠牲を要求している点にあると指摘している¹²。

こうした思想に対して疑問を抱いていたマクニースは、ヘブリディーズ諸島への旅行記『私はミンチ海峡を渡った (*I Crossed the Minch*)』(1938) 内の「守護天使との対話 (“Dialogue with My Guardian Angel”)」で、「私は左翼に共感している。理論上と魂においては。しかし、私の心

と核心においてはそうではない。理論上では—そうだ。」¹³と述べ、一定の理解を示しながらも革命思想が自身の信条ではないことを明かしている。

懐疑的な姿勢の根本には、集団の中での自己犠牲を好まない個人主義者としての側面があると考えられる。1929年に創作された詩「春の陽光 (“Spring Sunshine”)」では逃避的な個人主義に魅かれる語り手の迷いが示されている。「間の世界」(I.1)にいる語り手は、窓辺で眠る老猫に目を留めた後、春の日差しが、「ミヤマガラス」のように忙しく鳴いたり巣作りを行ったりすることの価値を問うていると語る。春の日差しによって引き起こされたこの問いは、終わりの無い喧噪や知識の蓄積の必要性についての問いへと続いている。その後、行動の必要性和不必要性の間の逡巡は、「温かい砂の眠りに頭を隠し、騒音や厄介事に困まることがないのは良くないのか、良いのか」(II.13-15)¹⁴という、不必要性を積極的に考えるものに変化している。最終連で語り手は、「騒音や厄介事」からの逃避願望を明かす。

いつも笑っている太陽の静けさの中に居させてくれ
それから私の笑いを自由にし
私自身をキーキー、カーカーという音の向こうに埋もれさせてくれ
下の世界、黄色信号の底の世界に¹⁵。(II.18-21)

「私」は騒がしく迷いの多い「間の世界」から、静かな「下の世界 (a below world)」に行くことを望んでいる。この詩で「下の世界」は、「眠り (sleep)」(I.14) や、埋葬を連想させる「埋める (bury)」(I.20) といった語で表現された死のような静けさに満ちている。太陽の光はどちらの世界にも同様に降り注いでいるものの、語り手が望むのは周囲の生命からの疎外である。最終行の「黄色信号 (amber)」は、進行を許可する青信号と停止を意味する赤信号のあわいにあり、ここでは不安定な社会を表象することで¹⁶、「グレアムとアナへの手紙」でも描写されていた、思考の形成と安定を妨げる社会の様相を喩えていると解釈できる。さらに言えば、「(快楽などに) 身を任せる」という意味を持つ19行目の“indulge”という語によって、「下の世界」への逃避が快楽主義的な側面を併せ持つことも暗示されている。

個人主義者の逃避主義的・快楽主義的な反世俗性は、政治的な示唆を含んだ詩「個人主義者は語る (“The Individualist Speaks”)」にも見られる。語り手は第1連で、「僕たちの祭 (our Fair)」

(1.1) に言及し、「この谷で僕らは敵のことなど覚えていられないのだ」(1.4) と述べ、自分たちの居場所の平和について得意げに語る¹⁷。それにも関わらず、戦争の預言を知らされると、それまで「僕たち (we)」という人称を用いていた語り手は、「僕 (I)」と「君たち (you)」との違いを挙げ、犬と共に「祭」から一番離れたところに逃げることを宣言する (1.16)¹⁸。「祭」は牧歌的な谷の様子を表わしているだけでなく、それ自体が人々の共有経験のための〈場〉を象徴する。ゆえに、語り手の逃亡は共同体からの隔絶も意味するのである。

これまで考察した例から分かるのは、〈個人性の喪失〉が、高度化する文明にその原因を求められているほか、マクニースの作品では共産主義への盲目的な追従として批判的に言及されていることである。反対に、同時期に書かれた作品において「個人性」は、社会からの疎外を願う、逃避的で快楽主義的な傾向を持ちうる性質であることが示されている場合もあった。マクニースの「個人性」に関する考察は、決定的な判断にこそ至っていないものの、共同体における個人の立場に対する問いとして、主要な関心となっていたと考えられる。

3. 詩における〈交信〉

3-1. 〈共有〉への志向

前節の最後に考察した「個人主義者は語る」では、「個人性」を固守する姿勢が逃避主義と結びつく可能性を孕んでいた。しかし、マクニースが非政治的な態度の持ち主であった、という結論は正しくない。30年代に創作された作品の中では、知識人階級の芸術家が持つ反社会的態度への自己言及的な批判が展開されていることがある。例えば、『秋の日記』の第3章の語り手は、少数のエリートが恩恵を得る世界を習慣的に受け入れてしまっていると明かすものの、最後にはそれを是正するために自分から行動を起こすことを決意している。

誰一人心が純粹な者はいない、むしろつねに不純な動機を持ち、
自己欺瞞を抱えているが、最悪な欺瞞は、「神よ、私は取るに足らない人間だ」と呟き、
呑気に寝そべって、顔を壁に向けることだ。
しかし、そうした習慣は直したい。上や外に目を向け
視野を広げて僕の両足で辿り、
最初は躓いたとしても、次にはほかの人たちと共に歩き、

最後は、時宜と幸運を得て、ダンスができるようになりたい¹⁹。(II.65-72)

語り手は自己欺瞞的な態度にまして、自己卑下に基づく逃避主義を弾劾している。世界に背を向けるような習慣を辞めて語り手が行おうとするのは、視野を広げて「ほかの人たちと共に歩 (to walk with the others)」くことである。逃避主義に対比された「行動」は、他者との〈共有〉経験として提言されているのである。

マクニースの作品では、他者との交流が、上記の例のような他者との行動への言及によってのみならず、対話や、他者に対する呼びかけといった言語的な形式でも表わされる。このような語り手と他者との間の、一方向的および双方向的な結びつきは、まとめて〈交信〉(英語で「コミュニケーション」[communication])と呼ぶことができる。〈交信〉は「伝達」という訳語があてられる場合もあるが、本論では、語り手の一方的な語りにも他者からの反応や行動を求めている側面が読み取れ、最終的には双方向的な交流が目指されていることから、「交信」という訳語を用いている²⁰。後述するように、この語はマクニース自身の詩論においても詩そのものの性質を説明する際に用いられているため、〈交信〉という行為あるいは状態がマクニースの詩学の中核を成していると仮定できる。

詩集『地が強いる (The Earth Compels)』(1938)中の共通した構成を持つ三篇の詩には、そうした〈交信〉の一例が見られる。「6月の雷 (“June Thunder”)」では、冒頭で車に喩えられた「6月の日々」(1.1)が、次々に木や植物の間を通り抜ける様子が描写されている。しかし、自然の生気に溢れる季節に対する喜びを表明しているように思える語り手は、この喜びを感じたとほぼ同時に嵐の到来に気づいている。豊かな夏の再来をうたった箇所は、実は以下のように連を跨いでいる。

All the flare and gusto of the unending

Joys of a season

Now returned but I note as more appropriate

To the maturer mood impending thunder

With an indigo sky and the garden hushed except for

The treetops moving.²¹ (ll.7-12)

季節の長続きしない喜びの
あらゆる炎や活気が

今戻ってきたものの私はより成熟した雰囲気
よりふさわしいことに群青色の空と共に
近づいてくる雷と木のとっぺんの動きを除いて
黙らせられてしまった庭に目を留める。

「今戻ってきた」との記述の後には、すぐに逆接の接続詞“but”が続いて、嵐の前触れが示されている。この連では文末の最後のピリオドを除いて、句読点やダッシュといった、休止をもたらす記号が用いられておらず、語り手の周囲の状況が急速に変化したことが読み取れる。

続く三連では嵐の様子が描写されるが、その中で注目したいのは雨の描写である。雨は、舞台の「幕」(l.16)に喩えられ、降りてきて花々を亡きものにしてしまうだけでなく、人間の感情や思い出にも終わりを告げる力を持つ「浄化、洗い流すような豪雨」(l.17)²²と表現されている。人間に対する精神的影響を雨に読み込む語り手は、自然現象である嵐から別の事象を想像していることが推測できる²³。

創作された1937年当時のヨーロッパ情勢を鑑みて、この詩の背景に、前年に始まったスペイン内戦や、第二次世界大戦勃発に対する不安の影があるとする見解もある²⁴。確かに、第6連で「雷」を意味する「前兆」(l.21)や「お告げ」(l.23)は、雷が嵐の前にやってくることを強調しているのだが、同時に嵐のような、何らかの深刻な事態の予言となっていることを示唆しているように思える。時代背景への言及を含んでいる可能性を踏まえながら、最終連に注目したい。

もし君が来て雨の透き通った
襲撃と雷の底なしの濠に挑んでくれたら、
もし今君が来てくれたら僕は嬉しいな

今もし今だけでも²⁵。(II.25-28)

語り手は「君」に向かって、自分のもともと来てほしいという願望を吐露している。仮定形の繰り返しはその願いの強さを示しているが、同時にその成就の不可能性を予感させる。それまで周りの自然を描写していた語り手は、この連から私的で直接的な呼びかけに変わり、危機的状況下で他者と同じ時間と場所を〈共有〉したいという語り手の願いを表明している。同様の構成を持つ「熱された時間 (“The Heated Minutes”）」では、このような〈共有〉の希求が、語り手の身辺の状況に対する否定的な感情に基づくことが、より明確に述べられる。この詩の語り手は、時間の経過に伴って増加する周囲のものや音に言及した後、「君」がここにいれば、「退屈さ」(I.10) や「張りつめたチクタクいう恐怖」(I.11)²⁶が緩和しようと繰り返すのである²⁷。これらの詩において重要なのは、相手に語りかけ、経験を〈共有〉しようとする〈交信〉の様態が強調されていると同時に、それが語り手の存在する外部の世界に対する認識を変えうるということが明らかにされている点である。そのためこれらの詩は、「君」を求めるたんなる恋愛詩ではなく、自己と他者の関係そのものに関する詩とみなすことができるのである。

上記二篇と同時期に創作された「庭の日差し (“The Sunlight on the Garden”）」では、これら二篇の作品では実現不可能であることが仄めかされていた「君」との経験の〈共有〉がすでに実現されたこととして語られている。詩の冒頭で語り手は、庭に降り注ぐ日の光が翳ってきたことから「我々は、その瞬間を／金の網かごに閉じこめておけなくなる。」(II.3-4)²⁸ことを実感させられる。時間の儚さの認識は「我々の自由は、飛んでいく槍のように／行きつくところへと行く。」(II.7-8)²⁹という終末感をもたらしている。「6月の雷」同様、この詩でも、近づいている未来の展望が決して明るいものではないことが暗示される³⁰。

しかしながら、語り手の意識は最終連で個人的な過去の思い出に向けられる。

And not expecting pardon,
Hardened in heart anew,
But glad to have sat under
Thunder and rain with you,
And grateful too

For sunlight on the garden.³¹ (II.19-24)

そして許しは期待せず、
新たに心は強ばるが、
でも雷と雨の下、
きみとすわったことを喜び、
感謝さえするのだ
庭の日差しに³²。

不吉な未来を案じるそれまでの語りから一転して、語り手は「きみ (you)」と〈共有〉した経験を想起する³³。この連では主節の主語や動詞が省略されているにも関わらず、この思い出については時制を変えて過去に属することを明示している (“to have sat”) ことが特徴である。語り手の回想は、第1連で時間の経過を否認なしに感じさせていた「庭の日差し」を受け入れ、それに「感謝さえする」までに心境を変化させているのである。

本項で扱った三作品では、二人称による直接の呼びかけは、それ自体が相手との言葉による〈交信〉であり、相手と空間や時間を〈共有〉するという実際的な〈交信〉への志向へと繋がっていた。このような個人間の〈交信〉は、社会的不安を背景に持つことから、たんなる自己充足的な関係ではなく、社会における他者との関わりを反映しているように思われる。次項では、個人の社会性が中心的な関心として扱われている『秋の日記』における〈交信〉の表われについて考察したい。

3-2. 『秋の日記』と〈交信〉としての詩

『秋の日記』は、1938年の8月から12月の間に執筆された二十四章から成る長編詩である。章の冒頭は、書いた日時や季節が言及されていることが多く、日記らしい形式が意識されている³⁴。詩を書いている現在から派生して、詩人個人の過去の回想や哲学的な思索などが綴られている章もある。

だが、『秋の日記』について特筆すべきなのは、時事的な話題が日記という体裁において、個人の関心と関連づけられながら語られることである。サミュエル・ハインズは戦争への危機の

高まりがこの作品に見られることを示した上で、以下のようにまとめている。

しかし、危機の時代にさえ個人的な生活は続く、そして彼の詩（『秋の日記』）におけるマクニースの功績は彼の生活を構成する部分を絡み合わせたこと、そしてそれらの部分が相互にどう作用したのかを見せていることであった。それは過去が彼の現在に対する反応にどのように影響を及ぼしたか、現在がどのように彼に過去の判断を強めたのかということであり、公共の世界がどのように私的な生活に侵入したか、私的な喪失がどのように彼の公的な危機に対する態度を彩ったのかということであった。それはあの一貫した 30 年代の関心事である、公と私の世界の相互浸透に関する痛切な最後の例なのである³⁵。（強調引用者）

前項で扱った三篇の作品においても、共同体全体に関わる問題を背景に、語り手が相手との繋がりを求めていることが確認できたが、『秋の日記』では、詩人が自身と世界の相互関係を描くことを通して、同じ経験を（共有）する人々との（交信）を図っていると言える。

そのためには、日記という形式が重要であった。『秋の日記』の冒頭に付された「覚書」でマクニースは、この詩における一貫性のなさを断った上で、「しかし私は〈日記〉と呼ぶものを書いてきたのだ。ひとは、日記や個人的な手紙でその時に感じていることを書く。科学的な本当らしさを試みることは一逆説的に一不正直（dishonest）なのである。」³⁶と述べ、日記や手紙といった私的な形式が個人的な感情を表わすのに適していることを明らかにしている³⁷。また、マクニース最後に「しかし、私が思うに詩とは何よりも正直（honest）でなければならず、正直さ（honesty）を犠牲にして『客観的』であったり、明快であったりすることを私は拒否する。」³⁸と宣言している。マクニースが以上のように、詩人個人の「正直さ」を重視する態度を表明している点を念頭に置き、個人的な生活と社会全体の経験の融合である「相互浸透」が、『秋の日記』において語り手と社会との関係ひいては社会における詩人の立場を示していることを明らかにしたい。

マクニースが『秋の日記』を執筆した 1938 年当時、ドイツで全権を握っていたヒトラーは、チェコスロヴァキアのズデーテン地方における少数派ドイツ人の存在を理由に、同国に圧力をかけていた。当時イギリスの首相であったジョゼフ・チェンバレンは、9月15日にヒトラーと

の会談に臨み、世界戦争を回避するために、フランスとともにヒトラーの考えを全面的に受け入れることに決めた。しかしながら、ドイツ側はズデーテン地方の即座の割譲を要求したため、イギリスは戦争に向けた準備を始めた³⁹。

『秋の日記』の第5章で語られる、プリムローズ・ヒルの木々の伐採も、この時期始められた戦争準備の一部である。

そこで窓辺に木の枝が伸びている僕のアパートに帰ると、
プリムローズ・ヒルに灯りがダリアの形に灯っている。
その丘の上は、かつて砲床として使われたことがあったが、
きっとまた同じように使われるのだろう。
血なまぐさい前線が
僕たちのベッドに集まってくる。
ちょうど密林で、勢子たちが、
毛皮や頭部を狩りの記念品にしようと獲物にせまるように⁴⁰。(II.57-64)

家のすぐそばの丘で行われている木々の伐採は、個人の生活に戦争が侵入している状況を示唆している。極めて私的な空間である「僕たちのベッド」に侵入者がやって来るという語り手の想像は、その深刻さを際立たせている。戦いあるいは敵たちを「勢子たち」に、「僕たち」を狩りの獲物に喩える語り手は、たんに戦争直前の危機的状況を、狩りの場面に見立てているだけではない。慣れ親しんだ寝床と、異国的で野生性に溢れた「密林」という、両極の性質を持つ空間のイメージを直喩によって結びつけることで、一国のみならず世界全体を巻き込む国際問題が、ロンドンに住む一個人に対して直接的に影響を与える事実を強調しているのである。

さらに第7章で、同じ木々の伐採の描写は音を通して語り手と戦争を繋いでいる。

難問に本当に答えがあるのか、
疑う暇はない。ヒトラーはラジオで叫ぶ、
夜はじめっとして静かだ。
窓の外で、森に鈍く打つ音が聞こえる、

プリムローズ・ヒルの木を切っているのだ。

木は、ローストチキンの肉のように白く、

おのおのの木は扇が閉じるように倒れる⁴¹。(II.20-26)

ラジオから聞こえるヒトラーの叫び声は、今語り手がいるロンドンの夜の静寂と対比され、戦争の予感を響かせている。同時に、語り手はヒトラーの声以外の音に気づく。それは、プリムローズ・ヒルの木々を切る「鈍く打つ音」である。伐採の音は、家の外から聞こえてくる点で、ラジオを通じているために一種の非現実性を帯びたヒトラーの声よりも、事態の深刻さを語り手に感じさせている。

さらに語り手は、木々の伐採の様子を視覚的にも描写している。切られて内側の白い部分が見えてしまっている木々は、「ローストチキンの肉 (the roast flesh of chicken)」に重ね合わされているが、「肉」を表わす“flesh”という語は、精神と区別した人間の肉体を意味する語でもあり、根源的な「血肉」を連想させる。それゆえ、語り手は傷つけられて内部が露になった木に、身体的な痛みを付与していると考えられる⁴²。このような生々しさは、戦争で人々が同様の肉体的苦痛を味わうことをも予示している可能性がある。

倒れる木々の直喩である「扇」にも、語り手自身の戦争への認識が反映されている。語り手は「閉じていく扇 (a closing fan)」にこれまでの生活の終わりの予感を重ね合わせていると考えられるが、同時に、“closing”の「接近する」という意味によって、戦争の始まりをも示唆していると解釈できる。また、木の倒れる動きから連想されているであろう「扇」の比喩は、その際に発生するはずの振動や音を表わしていない点が奇妙であるものの、あっけなく倒れる木々を静かに閉じる重みのない扇に喩えることで、戦争準備のあまりの迅速さや、それに対して抱いた無力感を伝えていると推測できる。戦争直前のロンドンの様子は、自宅近くで起きた身近な出来事とそれに対する語り手の心情を通して描かれているのである。

このような個人と社会の「相互浸透」の描出は、『秋の日記』の前年に出版された詩論『現代詩 (Modern Poetry)』(1938) で展開された理想的詩人像に通じていると考えられる。マクニースは、詩人を「娯楽提供者 (entertainer) と批評家あるいは情報提供者 (critic or informer) の混合物」と述べ、特に「情報提供者」の側面について、「彼の目的はたんに事実を記録するのではなく事実に対する彼の反応を加えられそれゆえに修正された事実を記録することであ

る。」⁴³と主張している。「情報提供者」としての詩人は、自身の個人的な感情や見解を通して情報を知覚し伝える役割を持つというのである。

続けてマクニースは、以下のように述べている。

詩的真実はそれゆえ科学的真実とは異なっている。詩人は世界の完全で正確な見取り図も彼自身の完全で正確な見取り図も与えてくれない、しかし彼は、上手くいけば、彼自身の世界に対する反応を正しく表現している混合物を与えてくれるのである。これは価値ある役割である、というも我々は皆、自分と自分の世界の関係に関心を持っており、恐らく我々には詩人と多くの共通点があるし、我々の世界も彼の世界と多くの共通点があるからである⁴⁴。

詩的真実を読者に与えようとする詩人は、自身の世界に対する見方を読者と〈共有〉することを試みており、詩それ自体が読者との〈交信〉であることを明らかにしていると言える。ここで述べられている詩人と人々間の共通項について、『現代詩』の冒頭で既に言及がある。マクニースは、詩人が自分自身と他の人々両方の「代弁者 (a spokesman)」であるとし、「それゆえ、詩人はある意味では最も自意識の高い人であるが、これは人としての自意識であって、詩人としての自意識という意味ではない」⁴⁵と述べ、詩人は詩人である以前に、共同体の一人であることを強調している⁴⁶。

一人の人間として人々に呼びかける詩人の姿は、より明確に政治的な関心を扱った章で顕著に表われている。第14章は、1938年10月に行われた、オックスフォード市議会の補欠選挙での経験を題材にしている。当時オックスフォード大学で教鞭をとっていた、マクニースの友人E・R・ドッズは、オックスフォード大学ベイリオル・コレッジの学寮長である無党派のA・D・リンゼイを擁立し、反ミュンヘン協定派の票を集めようとしていた。マクニースも支持者に加えられていたため、選挙当日オックスフォードに赴く。しかし選挙には、協定支持派で保守党のクインティン・ホッグが勝利してしまう⁴⁷。

この章では、この選挙前後のマクニースの心境が語られている。まず語り手は、オックスフォードへ車を走らせながら、自分が何をしようとしているのかを自問している。そこには自身の行動の正当性に対する疑いが読み取れるが、続けて語り手は人々の政治的な活動への参加が

必要であるとの見解を示している。

また、政治嫌いの気質の人でも
よりよい政治体制への公共の門を開かなければ、
これ以上個人の価値を守ることは
できないと銘記して⁴⁸。(II.45-48)

「政治嫌いの気質の人」には、選挙への参加に対して自問を繰り返している語り手自身も含まれていると考えられる。語り手は自分自身と、政治に未だ無関心を決めこむ人々の両方に対して、行動の必要性を訴えているのである。

この想いは、支持していた候補の敗北を語った後に再び表明される。

イングランドで最も高尚な人々は、常に
団結や連帯には最も不向きだったが、
すべてのドアの前をうろつき、すべての新聞見出しで吠えている
獣に向かって、今こそ皆団結しなければならない⁴⁹。(II.73-76)

語り手は、政治に関心がなく、行動を起こすために他者と協力したことの無い人々に向けて語っている。無党派の候補を立てることによって政治に関心のない人々の投票を促し、反ミュンヘン協定同盟を作ることを目的としたドッズの計画が失敗に終わったために、非政治的な個人主義者の政治参加の必要性は、一層強く感じられているのだと言える。

しかしながら、語り手の呼びかけは、たんなる政治的な要請ではなく、マクニース自身の他者の存在に対する願望を反映するものと考えられる。第23章では、団結した社会が、語り手自身と「君」との個人的な結びつきから始まることが示されている。

僕は事物や時間や人々の中に
友を見出だしてきたが、
一つ一つを取ってみると一半端な時間と通りすがりの人々だ。

今僕は償いをしなければならない、
出来事と直観を関連づけることに努め、
僕と君もしくは別の君、そして君と皆を結びつけようと努めなくては
ならない。
もう時間のことを川から抽象された
滝のように考えまい⁵⁰。(II.77-84)

語り手は、個々の人物や出来事にそれぞれ向き合うべきであると考え、自分自身と他者である相手との間に生じるような個人的な繋がりや連鎖が社会を形成する原理であることを示唆している。後半から「君」という二人称を用いて語っていることは、前項で分析した作品で、個人的な関係に言及する最終連が、「君」との経験の〈共有〉への志向を示していたのと同様に、それまでの「時間や人々」に対する抽象的で距離をとった見方を改め、他者と直接的に結びつく〈交信〉への決意を表わしていると考えられる。ここで示されている、個別の存在に対する傾倒は、マクニースの作品における中心的な概念の一つでもある。マクニースは『秋の日記』の第12章で、アイデア論に基づくプラトンの世界観への違和感を表明し、

僕にとって一週間は、どう見ても
七日のままであり、
どの火曜日も別の火曜日と同じではなく、
その違いを差し引いて、火曜日のアイデアと
結びつけるだけでは、その日を殺すことになる。
今日は一九三八年十月二十五日の火曜日⁵¹。(II.43-48)

と、一日一日を固有のものとして考えていることを明かしている⁵²。

哲学的な思索を綴った第17章では、個別のものへの傾倒が言語と関連づけられる。

なぜ認めないのか？ ほかの人々は常に
自己と有機的に結ばれ、モノローグは

言葉の死であり、一頭だけのライオンは

一匹ともう一匹の犬よりも自分らしくなく、また生き生きしていないことを⁵³。

(II.37-40)

他者が自己の構成要素であるとする語り手は、特定の読者や語りかける対象の存在を想定しない「モノローグ」を、言語としての機能を持たない語りとみなしている。重要なのは、他者との繋がりという社会原則が、文学の言語形式に適用されていることである。この背景には、『現代詩』の前身となった評論「現代詩における主題 (“Subject in Modern Poetry”）」(1936)における、「文学は言葉で出来ており、言葉は意味を伝えるものである」⁵⁴との主張が読み取れ、詩を構成する言語そのものが社会の構築物であるという考えが表明されているのである。

『現代詩』でマクニースは、情報をありのままに伝える科学的な言語使用と比較して、殆どの人は詩的に言語を使用していると述べる。

私たちは「会話をする」時、冗談を言う時や、使い古されたメタファーもしくは生彩のある俗語を使う時、緩徐法もしくは誇張による感情を表現する時、汚い言葉もしくは過剰な誇張表現を使うことで鬱憤を晴らす時、「洗濯物を外に干したらその瞬間に雨が降る」と言う時、私たちは科学的にとりより詩的に話しているのだ⁵⁵。

日常の様々な言語表現が潜在的に詩であるとしている点だけでなく、それを話し相手が想定された「会話」において見ている点に注目したい。マクニースは、詩の本質が面と向かった他者との〈交信〉の様式にあることを明らかにしているのである。

ゆえに、『秋の日記』中の「モノローグ」が言葉の死であるという記述は、言語が本来〈交信〉に用いられるものであるとの考えを示し、詩人の社会性を強調しているのだと言える⁵⁶。そうした見解に基づいて、自分と同じ世界に生きる人々と個人的な経験や意見を〈共有〉する詩を創作するマクニースは、〈交信〉する詩人像を自ら実現しようとしていると考えられるのである。

4. おわりに

本論では、1930年代のマクニースの作品が、当時のイングランド社会に共通した問題意識を

反映していることだけでなく、その中心に他者との〈交信〉を目指す意図が見出だせることを明らかにした。詩人である前に一個人であるとの自覚は、知識人の間で支持を拡大していた共産主義思想と関連づけられることがあるものの、政治的コミットメントについてマクニースが曖昧な立場をとっていたことは本文中でも指摘した通りである⁵⁷。むしろ、「正直さ」を信条として個人の経験を語る姿勢は、詩が日常的な〈交信〉の一種であり、それゆえに共同体の中に位置づけられるとするマクニースの主張に直結している。

30年代の他の作家達も、同様の見解を有していた。オーデンは、「詩の手段は言語であり、その手段によってすべての社会的な活動が行われるために、詩には人々が絵画や音楽のような他の芸術には要求しようとは決して考えないような（実際には音楽はおそらく行動にははるかに効果的な動力であるにもかかわらず）要求が課されるのだ。」⁵⁸と、詩に人々が寄せる期待が言語の社会性によるものだと指摘する。しかし詩人は「聖職者、哲学者、政党の煽動者」であることはほとんどなく、（あるとしても）ほんの偶然でそうであるだけであり、「説明するのは非常に難しく、認識するのは非常に簡単なある特定の方法において言葉を操ることに対する特別な関心と能力を持つ」だけで、それを除けば「普通の人々（ordinary men and women）」なのだ⁵⁹と強調している。

マルクス主義批評家で詩人でもあったクリストファー・コードウェルも詩の歴史を考察した著作『幻想と現実（*Illusion and Reality*）』（1937）で、「芸術は社会の産物である。」⁶⁰と主張している。コードウェルはさらに唯美主義者たちが社会と隔絶した芸術を目指したことに触れ、

しかし芸術作品は社会のなかに生きるものである。芸術作品を構成する諸対象は、つねに社会的関連をもっている。芸術の素材となるものは、単なる騒音ならぬ語彙による単語であり、偶然の音響ならぬ、社会的に認められた音階に基づく音符であり、無意味な斑点ならぬ、意味のある諸形象なのである。これらのものはみな情緒的連想をもち、しかもそれは社会的なものなのである⁶¹。

と述べ、芸術とその構成要素がすべて社会に内在していることを示している。

以上のような30年代詩人らによる詩の社会性の議論の革新性をより理解するには、1920年代のモダニズム詩人からの影響や、それ以前の19世紀的な詩人像に対する反応といった文学史

的な観点も併せて考察しなければならない。さらに、こうした時代におけるマクニースの特異性は第一に、〈交信〉を、他者との〈共有〉への志向を示す形で表現していることにあるが、30年代以降の作品にも継続して〈交信〉とそれに基づく詩人像の確立に対する関心が読み取れる点に、戦後保守的な詩へ回帰した詩人達との相違があるように思われる。これらの議論については、今後の研究で考察していきたい。

¹ 本稿におけるマクニースの詩作品の引用はすべて、Louis MacNeice, *Collected Poems*, ed. Peter McDonald (London: Faber, 2007) による。詩の行数を括弧内に示し、ページ数は註に表記する。註で用いるマクニースの著作の略号は以下の通りである。

[CP]: *Collected Poems*, ed. Peter McDonald (London: Faber, 2007).

[ICM]: *I Crossed the Minch* (1938. Reprint. Edinburgh: Birlinn, 2007).

[MP]: *Modern Poetry: A Personal Essay* (1938. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 1968).

[SAF]: *The Strings are False: An Unfinished Autobiography* (1965. New ed. London: Faber, 2007).

[SLC]: *Selected Literary Criticism of Louis MacNeice*, ed. Alan Heuser (Oxford: Clarendon, 1987).

特に注記が無い場合、原文の日本語訳は引用者によるものだが、下記の翻訳を参照している際は註に明記する。

『ルイ・マクニース詩集』高岸冬詩・道家英穂・辻昌宏編訳、思潮社、2013年。

『秋の日記』辻昌宏・道家英穂・高岸冬詩訳、思潮社、2013年。

² マクニースの北アイルランド詩人への影響を論じた論考が含まれている論文集としては、*Louis MacNeice and His Influence*, eds. Kathleen Devine and Alan J. Peacock (Gerrards Cross: Colin Smythe, 1988) がある。

³ マクニースはゴランツ (Gollancz) 社から1929年に『でたらめな花火 (*Blind Fireworks*)』を出版しているが、本論では社会的な主題を積極的に扱った1935年の『詩集』を詩人マクニースの出発点とみなして論を進める。

⁴ リチャード・ダンソン・ブラウンは、同世代の詩人スペンダーとデイ＝ルイスと、マクニースとの間の違いを彼らの詩論の題名に見ている。スペンダーの「詩と革命」(“Poetry and Revolution”)、デイ＝ルイスの「革命家たちと詩」(“Revolutionaries and Poetry”)に明らかのように、二人が共産主義的な革命思想を推し進めるための詩学を確立しようと試みている一方で、マクニースは「今日の詩」(“Poetry To-day”)という評論の題名を取ってみても、詩自体に関心を持ち、詩と政治を同じ土壌で語ろうとはしていないことが分かる。Richard Danson Brown, *Louis MacNeice and the Poetry of the 1930s* (Tavistock: Northcote House, 2009), 41.

⁵ CP, 3.

⁶ この詩の『アイスランドからの手紙』収録時の題名は、「グレアムとアン・シェパードへの手紙 (“Letter to Graham and Anne Shepard”）」であった。

⁷ CP, 49.

⁸ CP, 49.

⁹ CP, 51.

¹⁰ マクニースの作品は収録されていない。この事実が、マクニースを共産主義に一時傾倒した詩人たちと区別する根拠として提示されることが多いのだが、1932年は『詩集』の出版以前でマクニースが詩人としての地歩を固める前であったことも一因と考えられる。『ニュー・シグナチャー』の続編である、『ニュー・カントリー (New Country)』(1933)にもマクニースの作品は選出されなかった。

¹¹ SAF, 146.

¹² これは序文におけるロバーツ自身の主張を踏まえていると考えられる。ロバーツは、「他者の重要性の認識が時に共産主義者の態度の本質に思えるものになるのは当然のことである。それは、自身は野の花のように取るにたらないものである、あるいは、他者が利益を受けられるように自身の幸福を犠牲にすることを良しとする認識である。」と述べて自己犠牲を容認している。New Signatures: Poems by Several Hands, ed. Michael Roberts (London: Hogarth Press, 1935), 18-19.

¹³ ICM, 130.

¹⁴ CP, 30.

¹⁵ CP, 30.

¹⁶ 「黄色信号」は“amber”の比較的新しい意味で、この意味のOEDにおける最初の用例は1929年のものである。また、用例として「グレアムとアナへの手紙」中の一節が採用されている(“And always need a noise, the radio or the city, / Traffic and changing lights, crashing the amber,”[42-43])。CP, 49. この語には「黄色信号」の役割から派生して、比喩的に「変化や危険が近づいていることの知らせ」という意味を含んでいる場合があるという。“amber, n.1 and adj.” OED Online. Oxford University Press, June 2014. Web. 14 August 2014.

¹⁷ CP, 16.

¹⁸ CP, 16.

¹⁹ CP, 106-07; 『秋の日記』、24-25頁。

²⁰ レイモンド・ウィリアムズの著書『コミュニケーション (Communications)』では、20世紀における新聞の読者数の拡大やテレビ、ラジオの台頭がイギリス社会に与えた諸影響を、広汎なデータをもとに論じている。この場合「コミュニケーション」は一度に多くの人々に知識や情報を与える「通信」と言うべきモデルを指している。同著の「定義」という章でウィリアムズは、現代の「通信」への関心の高まりが、「社会がコミュニケーションの一形態である」との新たな認識を生み出したことを指摘している。Raymond Williams, *Communications* (3rd edition. Harmondsworth; New York: Penguin, 1976), 10. マクニース作品にも電話やラジオがモチーフとして登場するが、それらについて分析の中で触れる論考は多いものの、包括的な研究はなされていない。本稿は、詩学としての〈交信〉の考察を中心としているが、今後それを社会的文脈に位置づけるために、「通信」との関連も考慮に入れる必要があると考えている。

²¹ CP, 56.

²² CP, 57.

²³ ジョン・ストールワージーは雨と雷を、マクニースの詩に頻出する日光の母性とは対照的な、父性を象徴するものと解釈している。また、マクニースが、母から石の不動性を連想し、父を流動性と結びつけているとも指摘している。Jon Stallworthy, *Louis MacNeice* (London: Faber, 1995), 202.

²⁴ Michael Kirkham, “Louis MacNeice’s Poetry of Ambivalence”, *University of Toronto Quarterly* 56.4 (1987): 540-56 (543).

²⁵ CP, 57.

²⁶ CP, 59.

²⁷ ピーター・マクドナルドは、個人的なものへの関心の転換が、進み続ける現在時制で構成された詩の結末を、少しでも安定化させていると述べ、詩の構成という観点から見ても、私的な関係に言及した最終連が時間の経過とそれに伴う危険を抑止していることを明らかにしている。Peter McDonald, *Louis MacNeice: The Poet in his Context* (Oxford: Oxford UP, 1991), 77.

²⁸ CP, 57; 『ルイ・マクニース詩集』、57 頁。

²⁹ CP, 57; 『ルイ・マクニース詩集』、57 頁。

³⁰ エドナ・ロングリーは、このような不吉な予感が個人的な感情の世界に対する戦争の世界からの脅威を表わしていると述べている。Edna Longley, *Louis MacNeice: A Study* (London: Faber, 1988), 58-59.

³¹ CP, 58.

³² 『ルイ・マクニース詩集』、58 頁。

³³ 伝記によれば、「きみ」と呼びかけられている相手はマクニースが別れたばかりの妻メアリであり、この詩は離婚が成立した数週間後に書かれたという。Stallworthy, *Louis MacNeice*, 200.

³⁴ 章の冒頭で季節や時間に言及する場合、その章で語られる内容の導入となっていることが多い。例えば第 1 章は「ひそかに、ゆっくりと、ハンブシャーの夏は終わりに向かい、」(CP, 101; 『秋の日記』、10 頁)との書き出しで始まっているが、夏の終わりは、この後言及される人々の安定した生活や結婚の移り変わりも暗示している。Robyn Marsack, *The Cave of Making: The Poetry of Louis MacNeice* (Oxford: Oxford UP, 1982),

44. また、第 5 章で語り手は「今日は美しい日だった。何週間かぶりに初めて／明るい青空が広がった。」(CP, 109; 『秋の日記』、31 頁)と天候の回復を喜ぶものの、その後の記述では、ヒトラーの脅威が迫ってきたために、戦争への関心なしでは日常生活が送れないほどであることが語られる。晴天は、その下に暮らす人々の切迫した状況を際立たせているのである。

³⁵ Samuel Hynes, *The Auden Generation: Literature and Politics in England in the 1930s* (London: Bodley Head, 1976), 368.

³⁶ “Appendix 7”, CP, 791.

³⁷ 『秋の日記』執筆の前年に出版された『アイスランドからの手紙』は、大部分がオーデンとマクニースによる友人への書簡形式の散文および詩で構成されており、旅行記でありながら、その内容はしばしばアイスランド以外の話題に及んでいる。特にマクニースの二篇の書簡詩「グレアムとアナへの手紙」と「アイスランドへの追伸 (“Postscript to Iceland”、収録時の題名は“Epilogue For W. H. Auden”）」では、友人に対するメッセージの中に、社会的な不安に直面するべきかどうか迷う書き手の葛藤が読み取れる。

³⁸ “Appendix 7”, CP, 791.

³⁹ この時期、首相の決断に対して世論も揺れていた。9月21、22日に実施された世論調査では、男性の67パーセントがチェンバレンの政策に不支持を表明し、男女を合わせても、反対派が賛成あるいは戦争回避(のためにやむを得ない)と答えた合計人数より多かったという。Noreen Branson and Margot Heinemann, *Britain in the Nineteen Thirties* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1971), 317-19.

⁴⁰ CP, 110; 『秋の日記』、34 頁。

⁴¹ CP, 115; 『秋の日記』、50 頁。

⁴² 一方で、この比喩が戦争という公的問題だけではなく、私的回想を含んでいるとする見方もある。マイケル・オニールとギャレス・リーヴスは、ローストチキンが家庭的な連想であると解釈し、妻と別れたば

かりの詩人の孤独を見ている。Michael O'Neill and Gareth Reeves, *Auden, MacNeice, Spender: The Thirties Poetry* (Basingstoke: Macmillan Education, 1992), 200. マーサクもローストチキンの直喩の部分が、「蓄積された家庭的なイメージ (a fund of homely images)」を用いるマクニースの能力を示す例であるとしている。Marsack, *The Cave of Making*, 48.

⁴³ MP, 197. この定義の背後には、19世紀ロマン派の詩人、P・B・シェリー(1792-1822)の詩人像への反発がある。マクニースは、詩人が「どんなに認められていなくても立法者ではなく、本質的に預言者でもない。」(MP, 197)と断っているが、「立法者」や「預言者」は、『詩の擁護 (*A Defense of Poetry*)』(1821)で主張された、シェリーの詩人像である。マクニースは、『現代詩』だけでなく、1937年11月発行の雑誌『ニュー・ヴァース』(*New Verse*)第26、27号に掲載された評論「W・H・オーデンへの手紙 (“Letter to W. H. Auden”)」上など、ことあるごとにシェリーの詩人像に言及している。SLC, 83. 1957年に出版された詩集『訪れ』(*Visitations*)に収録された詩「大衆へ (“To the Public”)」でも、詩人である語り手が詩人を定義していく際に「立法者でもそうでなくても、僕たち自身は無法者だ」(4)と、「立法者」を否定することで自身の詩人像を提示している。CP, 495.

⁴⁴ MP, 197-98.

⁴⁵ MP, 1.

⁴⁶ マクニースは、『現代詩』と同年に発行された、雑誌『ニュー・ヴァース』の「コミットメント」特集に掲載された「宣言」において、詩人は「普通の人」の「延長」あるいは「濃縮」にすぎないとも述べている。“A Statement”, SLC, 98.

⁴⁷ Stallworthy, *Louis MacNeice*, 231.

⁴⁸ CP, 134; 『秋の日記』、99頁。

⁴⁹ CP, 134; 『秋の日記』、101頁。

⁵⁰ CP, 160; 『秋の日記』、170頁。

⁵¹ CP, 129; 『秋の日記』、86頁。

⁵² また第13章では大学で学んだ抽象的思想を振り返り、市井の人々は「決して／木々を見ても森を見ることはない」と言う教師らが、反対に「森を見て木を見ない」ことに気づき、現在では前者の見方に賛同している旨を語っている (CP, 131; 『秋の日記』、93頁)。

⁵³ CP, 12; 『秋の日記』、124頁。

⁵⁴ SLC, 59.

⁵⁵ MP, 31.

⁵⁶ オニールとリーヴスは、この記述をモダニズム詩人T. S. エリオットの言語観と比較している。エリオットは、言葉が一般の人々の声であるということを認識しながらも、他者からさらに退くために言葉によって他者と「接触 (contact)」していたのに対して、マクニースは「接触」を、異なるすべての存在に対する認識を鋭敏にするためのものだと考えていたという。O'Neill and Reeves, *Auden, MacNeice, Spender*, 181-82.

⁵⁷ 雑誌『ニュー・ヴァース』の1934年10月発行の11号において、編集者のジョフリー・グリグスは、事前に詩人達に依頼していたアンケートの回答を掲載した。その中の「あなたは何らかの政治的或いは政治経済的政党や信条を支持していますか」という質問に対し、マクニースは「いいえ。いつもより弱っているときは、そうであればいいのと思います。」と答え、自身の政治的コミットメントを否定している。SLC, 3-4.

⁵⁸ W. H. Auden, “Introduction to ‘Poems of Freedom’”, *The English Auden: Poems, Essays and Dramatic Writings*

1927-1939, ed. Edward Mendelson (London: Faber, 1977), 370.

⁵⁹ Auden, *The English Auden*, 370.

⁶⁰ Christopher Caudwell, *Illusion and Reality: A Study of the Sources of Poetry* (London: Lawrence and Wishart, 1950), 11; クリストファ・コードウエル『幻想と現実—詩の源泉についての研究』玉井茂・深井龍雄訳、未来社、1972年、19頁。訳の体裁を一部改変した。

⁶¹ Caudwell, *Illusion and Reality*, 108; コードウエル、『幻想と現実』、164-65頁。

Louis MacNeice's Poems in the 1930s and the Idea of Poetry as "Communication"

Nao IGARASHI

The poems written by Louis MacNeice in the 1930s often deal with social problems in contemporary England. It can be considered that a loss of individuality was one of the most serious concerns amongst them, with its relation to the rise of Communism. Although a considerable number of intellectuals including young poets and writers in England became communist, it is difficult to categorise MacNeice as belonging to the Left, as he expressed his suspicion about the sustainability of the trend and questioned the communists' idea of subsuming one's individuality in a group ideology.

However, it is also true that MacNeice recognised that the individualist's escapism and epicureanism should no longer be possessed by poets. He suggests that individuals choose action with others. In relation to this, what is notable in MacNeice's poems is the various forms of "communication" between the speaker and others. He wrote several poems of a similar nature, in which the speaker mentions the personal experience shared with his lover after hinting of approaching danger. Analysing those poems, it can be seen that the speaker's verbal message for a particular person is aimed at soothing his anxiety about contemporary society.

The poem-sequence *Autumn Journal* (1939) proves this tendency. Particularly notable are the sections in which the poet directly mentions the Munich Agreement – the biggest political upheaval in 1938 – and depicts how a person's private life and the public events were intermingled. It is revealed that the desire for the union with others was based on MacNeice's poetics rather than his political attitude. In his prose essays written in the period, he theorises that poetry itself is a form of "communication" with others, which means that the poet should be a mediator between information and readers. This concept defies the existing view of poetry as something isolated from society. Therefore, the aspects of "communication" in MacNeice's poems in the thirties can be said to reflect his attempt to integrate the poet into society as a whole.